

「都市空間論」の射程

大 森 弘 喜

I 都市が歴史家の関心を惹いてから久しい。歴史研究ではない都市研究では、権力空間としての首都や、農村と対立しその余剰を収取する都市権力などに関心が向いていた。¹⁾ 都市史研究でも当初はその傾向が認められるし、またその対象も後段に見るように、中世都市や近世都市にあった。²⁾ その後、歴史家の関心は近世都市から近代都市あるいは、民衆都市へと移行する。それは19世紀に勢いよくすすむ産業化と都市化と符節を合わせている。当然ながら、そこでの考察の対象は権力よりも都市住民に向けられる。とくに堆積する貧民＝下層民の存在に歴史家の関心は向くことが多い。なぜなら、彼らこそ産業化され都市化された社会で、その矛盾をもっとも強く体現しており、あるときは危険視され排除の対象に、あるときは救済と保護の対象となるからである。³⁾ 国民的統合が課題となる日本でとくに下層民の動向を重視する傾向は強いようだ。

- 1) 私の手許にある文献を眺めても、[W.A. ロブソン, 1958] はロンドン・パリ・東京など世界の主要都市の行政機構を叙述している。東京と大阪は初版にはなかったが、第2版では蛭山政道氏が執筆し収められている。簡にして要を得た叙述で参考になるが、主たる関心は都市行財政とその機構にある。[藤田弘夫, 1991] は、副題「飢餓と飽食の歴史社会学」が暗示するように、農村を収奪する都市権力のありようを多角的に社会学の見地から分析している。
- 2) [鶴川馨他編, 1995] 編者の一人 J.L. マックレインは序章で「江戸とパリ」を都市と権力の観点から叙述しているし、第2部の都市空間でもロジェ・シャルチュエがパリについて「権力と空間」を執筆している。我が国の都市史研究でも近世都市とくに城下町に主たる関心が向いていることは、『年報都市史研究』全11巻のうち半分近くが城下町研究に当てられていることから窺える。
- 3) さし当たって[増谷英樹, 1995]を参照。中世の特権都市ウィーンは19世紀半ばには周辺諸地域からの流人民の増加により市域を拡大し、民衆都市へと変貌を遂げるが、注目すべきは移人民の中でスラヴ系移民は忌避され、南の郊外に棲み分けを強要されることである。それゆえ彼らはオーストリア社会民主党の支持基盤となる。([「赤いウィーン」]) 後段のパリの外国人居住と重ね合わせると二つの都市の性格の違い、二つの国家の外国人政策の違いが浮かび上がり興味深い。

いずれにせよ、都市社会史のジャンルが確立する。

日本における都市史研究の第一人者である成田龍一氏は、「空間への眼差しと都市の近代化」[中野隆生編, 2006]のなかで、日本における都市史研究をサーヴェイしている。それによれば1970年代半ば以降歴史家の関心は農村から都市へと転換し、90年代に公刊された仕事には「空間」の視点が刻印されているという。すぐあとに見るように、実は「空間」は歴史の分野でも1980年代にはかなり明瞭に意識化されている。それはともかく、都市を歴史的に見る場合も実は多様であり、資本主義経済の矛盾が生み出す都市問題に着目する経済史的手法と、都市民衆の生きざまに着目する社会史的な手法がある。

Ⅱ　ところで、都市史研究における「都市空間」というコンセプトを、我々はどうに理解したらよいのだろうか。すぐに思いつくのは、物理的な空間としての「場」ではないか。都市史研究のパイオニア的文献、『日本都市史入門』（東京大学出版会, 1989）は、Ⅰ空間、Ⅱ町、Ⅲ人の3巻から成るが、Ⅰ空間の「都市史における都市空間研究」（玉井哲雄）では、都市空間を二つの要素、すなわち「都市形態」と「都市景観」からなるものと捉え、非文献資料による方法を唱えている。[高橋康夫・吉田伸之, 1989, p131]　これは建築史学や歴史地理学の発想である。この巻に収められた論考は都市形態と都市景観の観点から、中世都市や近世都市を具体事例にそって詳細に論じている。京都商人の立売から店舗形成に至る過程（高橋康夫「中世都市空間の様相と特質」）や、中世都市における寺院・寺町の空間支配（伊藤毅「中世都市と寺院」⁴⁾）、寺院の空間支配（境内と門前）に立脚してすすめられた中世後期博多の町割（宮本雅明「空間志向の都市史」）、武家地・町人地・寺社地・百姓地の区分保持政策のなかで、「相対替」などにより土地移動が放任された江戸武家屋敷地（宮崎勝美「江戸の武家屋敷地」）、日常的社会関係が反映され、時代を経るにしたがい変質する江戸期の祭礼空間（久留島浩「祭礼の空間構造」）などである。⁵⁾

4)　これが核となって[伊藤毅, 2003]が著わされるが、ここでは寺院の空間支配が及ぶ宗教都市だけでなく、「宿」や「惣村」など町人らによる町空間の形成が考察されている。

5)　この論考は建築史学や歴史地理学のアプローチではなく、歴史学的な要素を色濃く持っている。つまり、祭礼の原型を、居つきの家持である「本来の町人」が中心となり、その家族や奉公人が練り物の練り子や人足として参加するものとして捉え、それが社会の変化により変質するさまを辿っており、社会史の観点からも興味を惹く。

このように都市の城郭，寺院・神社，町屋敷，武家屋敷，町人地などの平面構成とそこに建つ建築物の立体的構成（視覚的構成，つまり景観）から都市空間を捉える建築史学あるいは歴史地理学の手法は，ある意味では明解で説得力がある。

では，歴史学では「都市空間」はどのように理解され，表現されているか。実は個々の研究によりその意味するところは異なるようである。これも幾つか具体的な研究を通して見てみよう。（私は都市史の専門家ではないので網羅的考察はできない。管見の限りでしかないと予めお断りしておく。）

比較的初期の作品に中村賢二郎編『都市の社会史』（ミネルヴァ書房，1983）がある。これは「空間・構造」，「社会層・制度」，「生活・意識」の三部構成で，さらに「空間・構造」は次の3篇からなる。矢守一彦『『ニュルンベルク年代記』と都市景観図』は，1493年刊行のH. シェーデルの標記著作に掲載された多くの世界都市の景観図を読み解く。それは風景画から都市誌としての景観図への発展であり，後にその俯瞰図の構図から都市地図帳へと変遷する原点だという。本論文は，前述した非文献資料を駆使した都市景観的都市空間論である。⁶⁾

長谷川孝治「中世イギリスのニュータウン」は，中世イングランドとウェールズに建設されたニュータウンには，方格状の街路網をもつ都市構造，グリッド・パターンが多いことをとりあげ，その軍事的・経済的意味を考察する。本論文は歴史地理学の視点から都市の平面図を検討したものだが，その地割りなどから支配層の意図や都市の性格を探っており，社会史的な傾向を帯びている。

川北稔「イギリス近世都市の成立と崩壊」は，ピューリタン革命から産業革命に至る近世後期に，大地主と大商人との連合支配体制が構築され，都市的文化が共有され，「都市の雅」が称揚されたという。この時代を代表する3都市，リヴァプール，マンチェスター，ブリストルが考察され，産業基盤の整備を果たし奴隷三角貿易で繁栄するリヴァプールと，そうした努力を怠り後背地での工業育成にも失敗したブリストルが対比されている。だが，産業発展には成功したリヴァプールも給水・教育・健康・救済などには市当局が関心を示さず，

6) 本論文の目次タイトルが「都市景観図」となっているのはケアレミスだとしても，タイトルにある『ニュルンベルク年代記』が，本文中では『年代記』，『世界年代記』と二通りに表記されているのは，読者を混乱させる虞がある。

いわゆる「コークス・タウン」と化したことが叙述される。本論文は近世都市の発展を産業化との関連のうちに考察した経済史的論考だが、本稿の主たる関心、都市空間的な観察は見当たらない。⁷⁾

これらの作品では都市空間は、景観ないしは都市平面図とほぼ同一であり、都市空間の歴史学的なアプローチは十分ではない。

ところで、都市史研究の先鞭をつけたフランス史学とくに「アナール学派」の仕事が紹介されると、事態は幾分変化してくるように見える。その導入的作品が二宮宏之ほか編集『アナール論文選4 都市空間の解剖』（新評論、1985）であるので、これに一瞥を与えておこう。

福井憲彦解題「近代生成史から都市空間の解剖へ」〔フランス都市史研究の現況〕では、多面体（ポリエドール）としての近現代都市の多面性を逐一とりあげて解説する。ヒトとモノを介した都市農村関係、都市内部の社会集団の空間的差異化、都市空間編成としての都市改造と権力、都市民衆の生きる空間としての都市などがそれである。これまでの社会経済史研究の蓄積を都市空間論の観点から整序し、本書に収められた論文にも言及しながら、都市空間を機能論的ではなく、社会関係の織りなす場として捉え、都市社会史における空間論のありうべき姿を提示している。ただし、本稿は解題とあるように、総論的な研究状況の概説である。内容的には、分節化した多様な都市空間を結びつけるモメントについての言及はない。

フランソワーズ・ショエ「都市を見る眼」は、原題が「都市計画における歴史と方法」とあるように、都市計画の二つの哲学ないしは思想—進歩主義的モデルと文化主義的モデル—を、建築家、思想家、哲学者の言説を引きつつ検討した難解な論文であり、私のような門外漢には簡潔に要約することは無理である。要は、都市空間を諸関係が織りなすシステムとして考察すること、上記の対立する二つの立場を弁証法的に乗り越えるには歴史に頼ることが必要である、という。歴史を無視し机上のプランによる機能主義的都市計画、それと対極にある昔の空間への郷愁を核とする文化主義的・深層心理学的都市計画、それら

7) 川北論文では、17-18世紀に誕生した都市群も、長谷川論文と同様に「ニュー・タウン」と呼称しているが、同じイギリス都市史で異なる時代の都市建設を、同じ呼称をもって呼ぶのだろうか。こうした点にも都市史研究における遅れを認めることができるし、それは図らずもJ. ルーゴフが指摘するように都市の定義が曖昧であることに起因するかもしれない。

双方を包含する第3の基軸の提唱ということになる。社会史の観点からは、絶対王政期以降に断続的に施行された都市改造事業の機能主義を批判する足場が、ここに提示されたと云える。だが、「都市計画の方法」と云うのなら、上記の二つのモデルの相克よりも、計画そのものを頓挫させるか、変更を余儀なくさせるのは、そこに住む人々の利害、とりわけ私的土地所有なのであって、著者にはこの点の歴史的解明をして欲しかった。近世都市の計画では貴族的土地所有が支配的だから、その点を顧慮しなくてもよいのだろうか…⁸⁾

J. Cl. ペロー「18世紀における社会関係と都市」は、大革命以前に既に旧体制を構成する三つの身分秩序（封建領主＝貴族、聖職者、第三身分）が動揺し変貌するさまを、コルベールの租税徴収のための22階級分類、チュルゴーの生産者の観点からの3階級分類、メルシエの『パリ素描』に見られる「職業と富」の観点からの9分類のなかに探る。著者の関心は、社会集団の空間的分布や経済変動ではなく、時間における変化であり、都市空間が重要なのは、それが時間を自らのうちに取り込んでおり、社会関係を基礎づけているからだという。これは都市社会史における空間論としては傾聴に値する指摘だろう。さらに都市計画における受益者は富裕層であり、広々とした空間、衛生的で快適な装備を享受するのに対し、庶民は依然として「生物学的法則」（伝染病と高死亡率）にしたがい、日常的不便さ（井戸水汲み、中庭などでの炊事、部屋内での家禽飼育）をかこち、変わらぬ人間関係をもつという指摘も、平凡かもしれないが重要である。つまり近世都市においても、新しさと「凝固した時間」の混淆が見られるという。

A. ファルジュ&A. ジイスパール「18世紀パリにおける暴力の舞台」は、1760－85年の期間にシャトレ小法廷で裁判となった暴力をとまなう軽犯罪を考察したパリ社会史である。これらの暴力を時間と空間、社会関係など多角的に分析した労作であり、興味深い。簡潔に要約するなら、暴力はセーヌ河の二

8) J. ル＝ゴフ「中世フランスにおける托鉢修道会と都市化」は、定義が曖昧で定量化も困難な中世都市を、托鉢修道会がおかれたところが都市ではないか、との仮説を検証した意欲的な論文だが、本稿の関心である都市空間論からは手に余る作品であり、また仮説的な論述が多いので本稿では取り上げない。例えば、都市を産業部門の観点から、「住民の一部で第3次産業活動に従事しているものが集住地域において優越的地位を保持しているとき、そこに都市がある」というのは、乱暴すぎる定義に思われる。さらに「優越的地位」という概念を精密化することは困難である、と語るのは思考停止であり頂けない。

つの小島をはさむ半径3キロ内と関の市門付近の盛り場に、週末から週初めに、日の長くなる季節に、街頭などに頻発する。暴力を振るう人々は貧民なのだが、彼らを十把一からげにはできない。なぜならその暴力は貧民間の些細な「差異」にこだわり、際立たせる行為だからだという。取り締まる警察は民衆から頼られる以上に畏怖される存在だった。というのも、警視は同時に裁判所の司法官でもあり、被疑者を法廷に送ることも、事件をもみ消すことも彼の裁量にかかっていたからである。大革命前夜のパリ民衆が、プライヴァシーもなく不衛生な住宅に折り重なるように居住していたから、いざこざや喧嘩は絶えることがないのだが、歴史として注目されるのは、たびたびサン＝タントワヌの家具職人が登場するように、親方と職人・徒弟・労働者間の紛争頻発である。親方は職人らが敬愛・信頼を示さず、勝手に集会し何かを決めていると慨嘆し、職人らは賃銀値上げなど労働条件の改善を訴えて行動する、その間に軋轢が生じ、暴力が起こる。ギルド制が限界に近づいていること、「営業の自由」が革命の日程に上ることが傍証されている。

フランソワーズ・パラン「パリの読書クラブ」は、復古王政下に叢生した読書クラブの地理的分布とその顧客の社会階層的分類を通じて、パリの文化空間を明らかにしたユニークな作品である。当時のパリ12区は山手線内の北半分よりも小さな面積でしかなかったが、そこに463軒の読書クラブが営業していた。分布地図（地図1）は、一見したところ先の暴力頻発地帯と重なるように思えたのだが、実はそれとはまったく逆の性格を有することが明らかにされる。つまり通常の人口密度とは関係なく、住民の社会的性格に深く関わりある。例えば、セース左岸ではカルチュ・ラタンに読書クラブが多いが、それはここに医学校・ソルボンヌなど学校が蟠集し、印刷・製本業、新聞社が多く、知的活動を営むものが利用するからである。著者はこうした地区を左岸、右岸併せて四つほどを挙げ、その特徴を記す。概して云えば、読書クラブの顧客はもっぱら新興ブルジョワジーであり、民衆は殆ど利用していないという。⁹⁾ 著者は、読書クラブが王政復古に戦いを挑むブルジョワジーの政治的武器なのではないか、と推論する。

9) だからといって民衆が字を読めないと考えてはならない。彼らはパンを購うために毎日長時間労働を強いられ、不衛生な居住環境のもとでかつかつに生きているのであって、未だ新聞や小説を読むだけの余裕がないのだという。

小木新造「十八世紀、江戸の都市空間」は、アナール派の論文に対応した十八世紀江戸の紹介である。大火、戦災、震災を経験したために江戸・東京には歴史資料が乏しく、明暦大火後の江戸の都市計画の全容は不明だというのが、後述するように防火を意識した街づくり－例えば、常盤橋から両国橋に至る大通りの拡幅、火除地設定など－と併せて、富士山と筑波山を遠望する都市景観を意識した街づくりでもあったという。上記の F. バランに対応する江戸文化の一つが、出版自由化の動きである。それまで京都出版界の出店でしかなかった江戸出版界は、日本橋の須原屋一統を中心に独立の動きを見せ、先進的な作品を世に送り出す。平賀源内、太田南畝、杉田玄白、森嶋中良、林子平らの著作がこうして陽の目を見るのである。確かに林子平の云うごとく、江戸「日本橋より唐、阿蘭陀迄境なしの水路也」かもしれない。

アナール派の都市空間分析は、質的に異なる民衆世界と貴族・ブルジョワ世界の同時存在を浮き彫りにし、また民衆世界内部の社会関係を「暴力」という視点から多角的に抉り出した。さらに、ブルジョワジーの知的営みとその政治的狙いを読書クラブの繁盛から推論するなど魅力的だった。

恐らくこうした影響を受けて、中村賢二郎編『歴史のなかの都市』（ミネルヴァ書房、1986）が刊行された。これは副題に「続都市の社会史」とあるように、前述の同じ編者の『都市の社会史』の続編であり、前作よりいっそう社会史への傾斜が見られる。本書は、「秩序と制度」、「生活と空間」、「娯楽と祝祭」、「知識と教養」の四部構成であるが、本稿の観点からは「生活と空間」が注目される。それは四つの論考から成るのだが、本稿との関連では次の三つをとりあげる。¹⁰⁾

田中峰雄「中世後期のパリ左岸地区」は、13世紀パリの左岸地区の都市化（いわゆるカルチュ・ラタン）が、大学の発展と軌を一にすることを、その地区の職業構成上の分析から探る。フィリップ2世「尊厳王」が新たに市壁を造営し、職人や商人のギルド結成を促し、彼らの市政への参加を認めたことが、セーヌ左岸の開発を促す。それまでシテ島に居住していた大学関係者が左岸に移

10) 最後の応地利明「南インドの定期市と売り手の定期市巡回行動パターン」は、現代南インドのある定期市を対象にした人文地理的考察であり、都市社会史のカテゴリーから外れるので本稿では取り上げない。

住したことを核に、社会的分業が展開する。日常生活関連の職種（食品関係業者・旅籠屋・飲食屋）や学問関連の職種（書籍商・写字・写本彩色）が平均よりも多いことがその証拠だという。資料上の制約があり確定的ではないが、確かにカルチェ・ラタンの「都市空間の様相」は窺える。

川北稔「ファッションとスラム」は、18世紀後半から19世紀後半にかけて、ロンドンに貧民が堆積しスラムを形成し、「スラム産業」で生きてゆくさまを描く。産業革命を経験しないロンドンが、これら貧民に与えたのがスラム産業、つまり、ドック建設に伴う荷役仕事とファッション関係の縫製業であった。19世紀半ば以降自由貿易に踏み切ったイギリス、なかでも世界に開かれた帝都ロンドンは輸入貿易の一大拠点であり、港を拡大しドックを建設したが、その荷役作業が貧民にかなりの量の「臨時的」仕事を与えた。他方で奢侈文化が花開き、庶民がファッションを好み洒落た洋服を着るようになったが、これも貧民に仕事を与えた。1850年にアメリカで発明されたミシンが、60年代にはロンドンの貧しい家内工業にも入り、いわゆる「苦汗労働制度」のもとで大衆向けの安価な衣類が作り出される。これは圧倒的に女たちの仕事であり、しかも興味深いことには、荷役仕事は夫、裁縫仕事は妻、という具合に、両者は労働者家族のなかで結びつくことが多かったという。本論考は、イーストエンドという貧民街の形成を特殊な労働形態と結びつけて論じており、著者はさほど意識していないが、都市空間論としても面白く読める。

白幡洋三郎「花見と都市江戸」は、吉宗の治世、享保年間（1720年代）の江戸で、飛鳥山、向島、御殿山の三つに吉野の桜が植樹され、桜の名所として庶民の娯楽となったこと、植樹は吉宗の鷹狩の復活と符節を合わせており、鷹狩に伴う農民への負担をねぎらう意味での桜苗の下賜ではなかったか、という。こうしてかつては貴族の楽しみであった花見が、しかも群桜を愛でつつ歌舞音楽、飲酒をともなう庶民の娯楽に転じたことを指摘する。都市空間論の観点から興味深いのは、三つの桜の名所がいずれも江戸御府内の外縁、農民と町民との境界に設定されたことであり、民衆は5、6里の距離を厭わずに花見にくり出したということである。非日常的だが民衆の空間移動の範囲が浮かび上がる。

以上の3篇のなかで、都市空間論の視点がもっとも鮮明に打ち出されているのは白幡論文であろう。飛鳥山、向島、御殿山の三つの桜山の空間配置に、將軍吉宗の意図が込められていることを指摘し、花見見物の民衆の移動距離が当

時の民衆の空間認識を窺わせるからである。セーヌ左岸の都市的空間の形成（田中峰雄論文）は、社会的分業の拡がりをもって確認されるが、大学人のセーヌ左岸への蟠集とその規模は資料上の制約があって把握できないし、住民の居住形態も明瞭とはいえない。というのは、基本資料であるタイユ（人頭税）課税台帳には、免税特権をもつ大学人とその関係者は記載されていないからである。著者は、被課税者の居住地データをもとに、通りごとの建物の間口を試算しているが、上記の理由からも、建物の形状が不明であることから、余り説得力はないように思える。

川北論文は社会経済史としては見事な作品だが、都市空間論に限定すれば、スラム形成に都市改造事業がどのように関わったのか、はいまひとつ明瞭ではない。鉄道ターミナル駅の建設が従来のスラムを一掃し、貧民の立ち退きと東部への移転を強要した事実はたびたび指摘されることだが、ロンドンではパリのように「やっかいな問題が生じにくい」（p176）というのは本当だろうか。イギリスでは私的所有とそこから派生する居住権への補償は、比較的簡単に「肩がつく問題」なのだろうか。公的空間と私的空間との相克・補完関係については、後段で改めて考えてみたい。

次に1990年代の作品、鶴川馨他編『江戸とパリ』（岩田書院、1995）を取り上げてみよう。本書は序章と終章を除いても全17章、総頁683頁からなる大著で、Ⅰ都市支配、Ⅱ都市空間、Ⅲ物資補給、Ⅳ都市文化、Ⅴ反抗、の五部構成である。本稿の関心「Ⅱ都市空間」に所収された三論考から次の二つを眺めてみよう。¹¹⁾

J.L. マックレイン「江戸橋－江戸における権力・空間・民衆文化－」は、明暦の大火（1657年）後に密集空間の緩和措置のひとつとして、「火除地」に指定

11) 最後の論考、W.H. コールドレイク「新政権の確立－徳川家光による権力の集中と台徳院「靈廟」」は、政治権力の確立に果たす記念碑的建造物の意義を説いた論考である。台徳院とは2代将軍秀忠の諡名であり、その靈廟は1632年（寛永9年）に3代将軍家光により、徳川家の菩提寺である芝増上寺境内に建立された。これは建築と政治権力との関わりを論じた論考で、後のR.シャルチュエよりも更に建築史学に傾斜している。社会史的に見て面白い部分もあるが－これまで歴史家が軽視してきた台徳院を取り上げたこと、総指揮に老練な井利勝を任命し、諸大名を動員する一大プロジェクトだったということなど－本稿の関心である「都市空間」に関わる論述はほとんどないので取り上げない。

された江戸橋詰の三角地が、その維持管理を委託された町人らにより、財政負担の原資調達の名目のもとに、1世紀後にはすっかり「町人化」される過程を描く。すなわち、商人らは当初居住が禁止される「床店」^{ユカヅミ}の形態で店舗を出すことを得、後には常設の店舗建築や貸し家建築にまで至る。他の商人らも、荷揚げのための河岸や蔵を建造する許可を得る。さらに18世紀末には、講釈師や楊弓場、水茶屋などが店を構える民衆の娯楽場ともなる。著者は、こうした特権付与と引き換えに幕府は、民衆の利害調節の最終裁定者としての権威をひけらかすことができた、と述べる。本論文は、「公的空間」が町人らの利害をうけて「私的利用」に蚕食されてゆくさまと、その際の公儀の論理を鋭くえぐり興味深い。また、日本人が好む「物事の決まりのつけ方」や、公私の曖昧さも指摘されている。ところで、その後も江戸には火事が起こるが、そのとき本来の機能を失った「火除地」を公儀は黙過していたのか、その責任追及はなかったのか、という疑問が生じる。

ロジェ・シャルチエ「権力と空間、パリにおける投資」は、近世パリにおける不動産開発の経緯を辿るのだが、切り口がさまざまであり細かな事実認識をどう理解するのか、難しい論考である。すなわち、節項目が、市壁と土地所有、都市景観、建造物、都市改造など互いに重複している。評者なりにやや強引にまとめれば以下のようなになるだろうか。16世紀初頭パリの人口は約25万人、1700年には51万人に達するが、多くの城壁都市と同様パリもこの人口増加に可変的ではない。土地を再分割して住宅建設することは起こらないので、市外地の開発がなされる。他方、市街地の土地は国王、大司教、修道院により所有されていたが、これが順次売却され、官職保有者、法服貴族、一部建設親方層などの手で開発され建物が立てられるという。表題の「権力と空間」に限定すれば、道路に突き出た建物部分の取り壊しやロンドン大火を教訓にした木造から石造への規制強化（1667年王令）が面白い。さらに同じ王令で「都市の安全と清潔」の強化が住民に課される。すなわち道路舗装に国家から多額の補助金が交付され、住民から徴収された清掃・照明税と合体して、ごみ回収と道路照明が実現するという。

本稿には幾つかの疑問を覚える。著者は16-18世紀にはパリの土地細分化 *lotissement* が停滞するというのが、前記したような封建的土地所有が開発業者に譲渡されたのち、分譲され細分化することはなかったとは考えにくい。都市生

活の最小単位が「ひとりの所有者の一戸の家がある土地」という規定が、細分化の抑制にどう関係するのか、これは課税の単位ではないのか。近世でもパリの土地は高騰しているのだから、増加する住宅需要に応えるためには、土地細分化あるいは建物の高層化は必然ではないのか。それを窺わせる事実、17世紀初頭サン・レイ島の土地分譲をうけた77人のうちに、石工など建設業関係の親方が17人（22%）もいることである。彼らはそこに自宅だけでなく賃貸用の住宅も建設したという。その土地面積や建物の大きさは、隣接する貴族らと同じ規模ではないだろうから、土地は細分化され建物は密集化したと思われる。また、近世パリは江戸と違って「都市の安全と清潔」にことのほか神経を配っていた、との記述も異論がある。¹²⁾

以上の論考では都市空間を意識しているのは、J.L. マックレインの論文であることは異論がないだろう。江戸橋詰の火除地という都市空間が商業的な利害により蚕食されてゆく過程と、その利害調整に権力誇示を意図する公儀との関係が摘出されて見事である。

Ⅲ 都市社会史に関する20篇ほどの論考を空間論の観点からコメントしてきたが、それらは標題からも窺えるように、2編を除いていずれも中世都市や近世都市に関わるものだった。産業化とそれに牽引されて加速する都市化は、19世紀以降の近代都市に多岐にわたる解決しがたい「都市問題」を賦与する。とくに首都にはそれが集約的に現れる。近世的な労働規制と保護を撤廃した自由主義は、資本の自由な活動を許したから、「苦汗制度」に象徴される都市貧困を生み出し、他方キャパシティを越えた人口集中は「住宅問題」に代表される居住環境の悪化を招いた。では、近代都市を扱う論考は、こうした難題を抱える都市を、空間論の観点からどう考察しているのだろうか、二、三の代表的作

12) 著者も云うように、パリではたびたび発布された都市衛生に関する王令は守られること甚だしく少なかったし、中世以来の悪習がその後の残ったことは周知の事実である。例えば排泄物容器の中身を道路や中庭にぶちまけたり、ごみを広場や中庭、道路へ捨てることは19世紀半ば頃まで続けられたことはよく知られている。[R.H. ゲラン、1987] 人間排泄物の処理については、これを農作物の肥料として使う我が国の方が、はるかに手際よく農民の手で処理されていたことは紛れもない事実ではないか。したがって江戸の町のほうがパリよりも清潔であったと思われる。但し夜間照明については17世紀末に5,000個余のランタンで照明されたパリの街路の方が、同時期の江戸よりは明るく治安上も効果があったと思われる。

品についてみよう。

石塚裕道『日本近代都市論—東京：1868-1923—』（東京大学出版会，1991）は、わが国の都市史研究をリードしてきた同氏の論文集であるが、明治政府の殖産興業・富国強兵策と関連づけて、東京の貧困、衛生、伝染病などを考察している。とくに第2章「世紀末東京の都市空間」と、第3章「資本主義・都市問題・民衆生活」が我々の関心から注目される。これらの章の内容は互いに関連し重複しているので、¹³⁾ コミに扱い簡潔に要約しておこう。明治初期の外来伝染病コレラの流行は、東京市と政府に衛生対策を突きつけるのだが、コレラなど伝染病防遏には有効な手だてがなく、避病院への隔離が唯一の策だったし、公衆衛生基盤としての上下水道敷設事業では、差し当たり上水道敷設が優先された。水系伝染病の防遏には下水道整備が重要だが、「神田下水」事業が頓挫したあとは、検討もされなかったという。結核蔓延ではスラムでの流行もさることながら、著者は「工場結核」が都市の結核を農村部まで拡大した元凶であるという。また武家地が町屋となり東京全体に70箇所ものスラムが形成され、細民が堆積された事実と、その改良をめぐる社会改良家・政治家の言説を批判的に検討している。

著者は都市改造事業が水道事業などに限定された理由を、明治政府が富国強兵を優先させ、民生を後回しにしたからであると云い、また公衆衛生施策が後退したとも云う。確かに、公衆衛生施策の基礎である疾病・死亡調査など統計が不備な状況では、有効な手だてを講じられないのは事実だが、では明治政府は、殖産興業・富国強兵をおびやかす国民の伝染病罹患・死亡激増の危機的状況を、いつごろ認識したのだろうか。この点の著者の叙述は不明瞭である。¹⁴⁾ もう一点は、下水道建設が着手されなかった理由を、尿尿の「汲取権」が売買の対象になり、裏長屋のそれは大家が保持していたことを挙げているが、それ

13) 「あとがき」にあるように、これらの章は、その節部分も含めて別個に執筆・発表されたが、一書として刊行されるときに是非とも論旨が一貫するようにリライトされたかった。代表的な伝染病たるコレラ、腸チフスと肺結核が別の章にばらばらに置かれているし、公衆衛生事業としての上水道事業も、スラムの叙述も別個の章に散在し、読者の理解を困難にしている。

14) p90では、政府は富国強兵策を推進するためにも公衆衛生への取り組みを重視し、軍医森鷗外をドイツに留学させたという。彼のドイツ留学は1884年であるが、他方でp95では、1883年に内務卿に就任した山県有朋は、蔵相松方正義とともに軍備増強路線をとり、教育・衛生・病院費を減額し公衆衛生を後退させたとも述べる。矛盾してはいないか。

は付随的なもので、基本は財政難ではないか。「神田下水」工事の頓挫も資金調達難であったように、首都の地下に下水道網を張り巡らすには莫大な費用が掛かることは容易に察せられる。現に今日でも地方都市では本下水が敷設されていないところは珍しいことではない。当時の国家と東京の財政事情からの検証が必要ではないか。さらに、上水道事業にもかなりの住民が中止を申し入れたと著者は云うが、その理由は明示されない。思うにこれにも財政が絡んでいたのではないか、つまり住民にも一定の工事費分担を求めたのではないか。

本書では、伝染病の流行とスラムとの関係のうちに都市空間論的な把握が見られるが、それも明示的ではないし、むしろ正当的かつ古典的な手法での都市問題分析のように思える。

石塚氏の次世代で現在都市史研究の第一人者と目されているのが成田龍一氏である。彼は、都市史研究の分析と叙述の手法に都市空間論を用いている。成田氏の業績は多岐にわたるが、本稿に関わるもっとも基本的な論考は、成田龍一編『都市と民衆』（『近代日本の軌跡9』、吉川弘文館、1993）所収の「近代都市と民衆」であると思われるので、以下その所説を簡単に眺めてみよう。氏は19世紀末から20世紀初頭までの我が国における都市の成長発展は、国民国家に包摂される過程でもあり、それゆえ都市が生活の規範と人々の結合を作り出す際に、国家の影響を強く受けるという。都市生活の規範とそこでの人々の社会的結合関係を、著者は「都市システム」と名づけ、その形成と変容過程を三つに時期区分し、それぞれの時期の特徴を分析する。

第1期は1860年から1900年前後までで、この時代は旧城下町が県庁・郡庁として再編される傍ら、鉄道の要衝（直江津）や貿易港（神戸・横浜）、軍港（呉）都市が成長してくる。首都東京は市区改正（1888年）でインフラ整備がなされる。とりわけ都市空間の均一化をもたらすのは、都市法規、伝染病と衛生制度、都市施設などである。なかでもコレラの周期的流行は衛生意識を植え付けるとともに、不衛生な貧民とスラムとを「負の価値をもつもの」として監視と排除の対象にのぼせる。

第2期は1900年前後から1935年までの「都市空間の展開期」である。東京、大阪が隣接市町村を合併し「大都市」に成長し、他方で産業都市（宇部・川崎）や観光都市（別府）が登場してくる。この時代の特徴は「都市問題」が発生し、いくつかの解決の処方箋が試みられることである。1919年制定の都市計画法

が東京のみならず地方都市にも適用されて都市基盤を整備する。賀川豊彦・山室軍平ら社会事業家らが救貧と民衆の自立を促す活動を展開する。「生きられた空間」¹⁵⁾では工場労働者に加えて事務系職員が増加して都市民衆の構成が変化するのだが、衛生は引き続き都市の主要な課題であり、慢性的疾患たる結核・性病が重みをもつが、国家は対策の一環として家庭婦人の役割を強調する。大都会では盛り場が息抜きの場所として活況を呈するのだが、昔の見世物や屋台からデパートなどモダニズム空間が主流になる。

第3期は1935年ころから1960年ころまでの「戦時の都市」である。重化学工業を担う都市群が現れ、他方東京・大阪などは「大都市」から巨大都市へと成長する。この時代の特徴は国家による都市空間の画一化がいつそう進み、消費の管理、衛生を梃子とした身体の商品化、言語の規格化もなされる。都市空間内では人々の水平的移動と同時に垂直的移動が盛んになり、また植民地都市も宗主国の意向に沿うかたちで改造される。

本論文は、日本近代都市史を都市空間論の観点から段階論的に整序したもので、私の如き門外漢にも分かる見取り図である。それは同氏の力量を物語ると同時に、後の仕事のグランドデザインでもある。だが、若干の疑問もない訳ではない。一つが時期区分の問題である。氏は時期区分となる指標を一切明示していない。画期がなぜ1900年前後、1935年、1960年なのか。通常の世界史の理解では二つの世界大戦がエポックを成すのだが、氏が日本都市史ではそれが妥当しないというのであれば、是非その理由を明示すべきだった。ことに第二次大戦をはさむ第3期には異論が出たのではないか。総力戦下の生産・消費・生活の画一化、個人の自由抑圧と、戦後の自由化とを取えて一つの時期区分に包摂するには、何か重大な理由があるように思える。近年の日本史研究では「連続説」が支配的のようだが、そうだとすると時期区分には相応の指標が必要である。もしかして、この三つの時期に通底する「衛生」の観点がそうさせるのか。

その「衛生」なのだが、私など西洋史を学ぶ者の観点からすると、日本史ではなぜ「公衆衛生」ではないのか、が考えさせられた。つまり日本では衛生が

15) 「生きられた空間」という表現は恐らくはアナール学派に由来する表現«l'espace vécu» だと思うが、私はその受身的言い回しには違和感をもつので、「民衆の生きた空間」と呼びたい。

公衆全体に関わる視点が稀薄で、いきなり個人の規範とか義務として押し付けられる、その違いが興味深い。¹⁶⁾ したがって、コレラにしても結核にしても社会全体でこれをどう防遏するかの観点が薄いから、都市衛生・都市改造では上水道は敷設されるが、下水道は後回しにされる。ここには、伝統的「養生」観に接木された「衛生」観が作用しているように思えるし、¹⁷⁾ 日本では都市権力が都市をシステムと見てはいないようにも見える。

三つ目の疑問は近代都市のもつ均一性と重層性の関係の理解に関わる。本文を読むと氏の発想の基本は都市の均一性であり、「そのコントロールのもとに多様な結合体をつくりあげ、重層的な空間を現出した」(p21 その他)と述べるが、私はこれにも違和感をもつ。近代都市でも、まずは地方などからの人口移動と定着があり、「営業の自由」のもとに社会的分業が展開し、都市空間のなかに多様な生活形態が展開される。公権力はもちろん優先的に空間を占有するが、それ以外のところは住民の自由な経済活動と欲望に応じて、工業地、商業地、娯楽と歓楽街、住宅地などが形成される。こうしたいわば自然に出来上がった都市空間が、社会秩序や経済活動に何らかの障碍を与えると、公権力による都市計画、都市改造の動きが生れるのではないか。住民に限定しても自ずとそこには「共生」のルールが合意されるのであって、上から与えられる規範ばかりではあるまい。つまり私は、近代都市は自由で多様な、ファッショナブルで猥雑な空間なのであり、——それ故にこそ、多くの人間を魅了し活気に満ちている——多様性と重層性が基本であると思う。それとも日本の近代都市は本来的に規制と規範が強いというのだろうか。¹⁸⁾

成田氏自身の作品を眺める前に、前記論文が収められた『都市と民衆』の他

16) もっともフランスでも「公衆衛生」が社会に留まらず個人の領域にまで踏み込むこと傾向をもつのは、その本質からして避けられない。伝染病予防であれ、都市衛生事業であれ、これを効果的に実施するには「私益」をある程度犠牲にし、「公益」を優先させる必要があるからである。だが、フランスでは前記した絶対王政下の屎尿・ゴミ処理に関わる王令でも、「1850年不衛生住宅の衛生化に関する法」でも、たびたび出された「ガルニの衛生改善を求める警察令」などでも、これが遵守されること甚だしく少なかった。思うにそれらが個人の自由な生活に干渉する公権発動と見なされ、拒絶されたからである。

17) この点は成田氏自身の次の論文が的確に突いている。[成田龍一, 1995]

18) 著者の都市の均一化機能を重視する見解は、次の叙述にも顕著である。「戦時の都市空間の制度化は戦時の状況に歪められ形成されたのではない。…戦時の都市空間は都市化の論理からの逸脱ではない。」(p53)

の論文も一瞥しておこう。北原糸子「江戸から東京へー都市問題の系譜ー」は、人別帳から統一戸籍法への過程のうちに、身分の平準化と空間の斉一化を見る。明治維新は身分制を壊したものの、これを「戸」に編成替えしたに留まり、フランス革命とは違い個人の解放には至らなかった。空間の編成替えでは、地面に番地が付され新たな行政単位が構成されるが、その過程でかつての「家主」が排除され、住民は戸のもとに管理されるという。確かに、武家地の町人地化により都市空間の身分制的分断化は終わり、斉一化がなされたかもしれないが、ではその後の東京で都市空間はどのように編成されたのか。そのなかでスラムはどう再編成され、新たな都市問題を提起するのか、その辺りの見通しが欲しい。¹⁹⁾

布川弘「都市民衆の階層と民衆運動」は第一次大戦後の民衆諸階層の「家」創出願望と運動、及び都市行政がこれに対応する社会政策を推進してゆく関係を描く。都市下層民衆は上昇志向を強く抱き中流階級への憧れをもっていた。それは「家」をもつことで実現されるのであり、この観点から米騒動の主体となり、川崎造船所におけるサボタージュでは8時間労働日より賃上げにこだわったし、大正10年の争議では友愛会の指導を退けて急進化した。他方、俸給生活者は名誉と体面を重視するわりには生活が楽ではなく、生活改善運動を展開し、自力では容易に解決しがたい住宅問題や湯銭問題では都市当局に対応を迫った。神戸市当局はこれに市営住宅建設や銭湯経営者に湯銭値下げを強く

19) 北原論文は副題に「都市問題の系譜」とあるように、江戸から引き継ぐスラム形成を明治初期について考察しようとしたものだが、本文を読む限りでは殆ど言及されていない。具体的な考察事例として挙がっているのは四谷伝馬町新1丁目だが、ここはスラムではない。そこに隣接するスラム鮫ヶ橋の江戸から明治期への変化こそ主題ではないのか。また、「戸籍法により戸が国家の基本単位であり、個人はその戸主との関係で位置づけられることはよく理解できるが、それが「国家が国民に仕掛けた『罨』であった」(p78)という叙述は理解できない。不徹底な個の解放がどうして「罨」になるのか、丁寧な説明が欲しい。

次の小路田泰直「帝国の都市と『自治』」は、明治初期の都市市民の創出過程を扱う論文だが、都市空間の観点からの把握は殆ど見られないので本文では取り上げない。本稿は、国家主義が強すぎて違和感を禁じえない。例えば、市場を生み出すのは都市であり、その都市を生み出すのが国家だという断定や、国家が「善き市民とその自治」をつくり出すのであるという思い込みなどは、十分な予備的作業なしの断定であり賛成できない。市場や町が国家権力と関わりなく造られるのは、西洋都市史研究の教えるところである。また、維新政府が創り出そうとした「市民」像は、天皇制下の「臣民」像とはどう関わるのか、そうした前提作業なしに、「市民とその自治」を語るのは乱暴きわまりない。

迫るなどで対応したという。民衆諸階層の自意識に着目した好論文であるが、都市空間の観点は稀薄である。

芝原篤樹「巨大都市の形成—市区改正から都市計画へ—」は、「大大阪」における都市計画の先進的試みを政策立案過程にしばって見たものである。前述の1888年東京市区改正条例が都市計画の嚆矢だが、産業化と人口膨張は新たな都市改造を迫っており、それが結実したのが1919年都市計画法であった。大阪市は関一市長の下に、独自の「大阪市街改良法案」を用意して内務省と折衝したが、当面は準用法を制定することで落着いたらしい。この大阪市街改良法案は、都市の住宅問題と産業発展を両立させるために、市外をも視野に入れ、地帯収用、土地区画、土地使用制限などの規定を盛り込んだ画期的なもので、都市計画政策史の上からは興味深いものだが、著者自身がいみじくも語るように、実際の事業は幹線道路網の建設だけに限定され、住宅建設など社会政策的施策は実施されなかったという。ではその理由は何か、残念なことに本文では明示されない。F. ショエ論文のコメントでも述べたが、社会改良家や学者が描く都市計画デザインがいかに革新的であっても、多くが不首尾に終わるのが現実であることを直視するなら、歴史家は見果てぬ夢を追いかけるよりも、挫折の原因を総合的に探ることに目を向けるべきではないのか。

戦間期日本の都市空間を扱う論文が二つある。岡田知弘「重化学工業化と都市の膨張」と、雨宮昭一「戦争と都市」である。岡田論文によれば、戦間期とくに1930年代に都市人口が急増したのは地方都市、とりわけ簇生した重化学工業都市であった（川崎・八幡・尼崎・小倉・西宮・宇部・戸畑・日立・新居浜など）。重化学工業はその稼働のために多岐に亘る社会的労働手段（敷地・淡水・電力・輸送手段・下請企業・男子労働力など）を必要とし、都市の空間構造を激変させた。地方都市は雇用と税源確保のために工場誘致をしたが、産業公害（河川などの化学汚染・濁水・地盤低下・煤煙など）の被害にあい、また生み出した富の大部分を本社機能が集中する東京・大阪に移転されてしまう。富を集中した東京・大阪は新たな雇用を創出し、都市電鉄資本によるデパート・盛り場・商店街が形成され、沿線には住宅建設が展開するなど、多様な都市空間が広がってゆく。この時代に都市計画から国土計画への転換が日程に上る。

雨宮昭一「戦争と都市—強制的画一化と都市形成—」は、戦時期になされた「強制的画一化（グライヒシャルトゥンク）」を、企業城下町日立について考察する。

1937年戦時経済体制のもと商工省は地方工業の振興策を打ち出すが、茨城県でも県政財界を挙げてこれに対応した。この過程で日立市は日製（日立製作所）の発展に適合するかたちで市町村合併を行い、重機械工業の企業城下町へと変貌する。戦後解放で労働運動は高揚するが、1950年の労働争議の敗北後に結ばれた労働協約で、企業の支配力は完全に回復し、労働者の自立性は奪われ第2の画一化が達成されるという。本稿は「グライヒシャルトゥンク」という切り口で企業城下町・日立市の変貌を見たものだが、率直に云って第1、第2階梯ともその内実の叙述が弱い気がする。前者では日立市域の拡大、日製の意向での市長選任、大政翼賛会の中枢に日製・日鉱の幹部が就いたこと等を、後者では新しい労働協約の締結をもって、強制的画一化の達成だと云うが、都市空間の強制的画一化を云うには、日製従業員へのパテルナリズム実施、市民生活に関わる日製と国・県・市の支配力—例えば市政支配の状況、コネ就職、社会施設への援助など—を具体的に分析する必要があるのではないか。

最後に川越修「ヨーロッパの都市／日本の都市」を見よう。²⁰⁾氏は、近代都市の三つの局面を、①伝統都市の解体、②外的都市化、③内的都市化に分け、共時的に起こったコレラ流行とそれへの民衆行動を絡ませて、都市化の進展状況を判断する。具体的に云えば、コレラ流行が民衆騒擾を惹き起こした1832年パリ²¹⁾と、そうした騒擾が起こらなかったロンドン、ベルリン、東京との比較である。伝統都市解体のピークにコレラが流行すると、パリの如き騒擾が発生するのではないかという仮説は、1849年のベルリン、1886年の東京には

20) 大門正克「農村から都市へ」、橋谷弘「植民地都市」、中川清「都市日常生活のなかの戦後」は本稿では取り上げない。大門論文は農村青年の苦学を通しての社会的上昇を論じているが都市プロパターの問題ではない。橋谷論文は京城・奉天など植民地都市の日本的改造を見るが、これもやや特殊な領域であり、近世都市から近代都市への以降という文脈から離れている。中川論文は戦後の中絶をめぐるユニークな論文だが、本稿でいう都市空間論とは視点を異にするので割愛する。

21) 1832年パリ・コレラについては〔大森弘喜, 2004〕を参照せよ。補足的に云えば、民衆蜂起の背後には産業社会への転換に伴う生活基盤の崩壊のほか、民衆の病院・避病院への強い恐怖があった。パリ臨床医学は病理解剖学の上に確立したから、パリの病院では死体解剖が頻繁になされており、これが民衆の不安と恐怖を醸成していた。例えば、パリ臨床医学の権威の一人で、心臓病の研究で功績があり、ナポレオンの侍医でもあったJ.N. コルヴィサール(1755-1822)は、シャリテ病院に12年間勤務したが、この間当病院は死んだ患者の全ての遺体を死体解剖に回したという。〔F. Haas & S. S. Haas, 1995, p14〕パリ学派はこうして病理解剖にたった新しい診断法に途を開いたのである。

妥当しないが、それは既に両都市とも「外的都市化」がある程度始まっているからだという。これは史実と合うのだろうか。ベルリンについて私は殆ど知らないのでコメントできないが、東京は、前記石塚裕道氏の著作によれば、1888年に東京市区改正条例が出され都市計画が組上に上ること、その事業の主力は幹線道路整備にあり、上水道事業は追加的に始められ、紆余曲折を経て漸く1898年頃に完了した。つまり被害甚大だった1879年および86年のコレラ流行の数年後に、「外的都市化」が開始され、十数年後に一応完了したことになる。東京で1886年に騒擾が起こらなかったのは、「外的都市化」が開始されていたからだ、との氏の説明は事実に反することになるだろう。²²⁾ となればコレラの恐怖を前にした民衆は、伝統的な行動様式で身を守るか——お札やお守り、祓い清め、コレラ送りなど——政府の強権的な石炭酸による消毒と避病院への隔離に従うはかなかったものであり、著者が云う「外的都市化」事業の効果を民衆が認めた訳ではないようだ。第二帝政期バリの如き都市改造が東京では実現不可能であるために——財政的理由の他に、そのノウハウの蓄積欠如、軍事と殖産が優先されたなどの政治的状況——都市基盤の整備が十分なされないまま、個人への衛生意識の強要がなされたと云える。著者の云い方をするなら、「外的都市化」を欠いたまま「内的都市化」に着手されたということである。

もう一点気になるのは伝統都市の解体の契機を、人口膨張とスラムの形成に見出す点である。ブルジョワ革命以前に既に存在していた貧民窟がそれ以後に膨張したのは、広い意味で産業化社会へと転換したからに他ならず、無産の労働者が激増した結果である。「伝統都市の解体」は、貧民救済のシステムが埋め込まれた旧体制が瓦解し、自由主義の経済下では無産の労働貧民の生活保障は失われたこと、それゆえ労働貧民は体制への憎悪と反撥を強め、「社会的脅威」となる点にこそ求められるべきではないか。彼らは近代都市での共生のルールを無視し、仲間内の助け合いと付き合いを大切にする反面、自由で奔放な遊蕩生活をし、暴力を行使する。その典型が19世紀前半のバリであるが、同じ頃のロンドンでは、スラムの可視化は疑うべくもなかったが——エンゲルスの

22) 著者は、他方で1880年代の東京が「江戸の遺産」を巧みに受け継いだことも、コレラ騒擾が起こらなかった一因だと云う。「江戸の遺産」とは、玉川上水と神田上水の給水システムと排泄物の近郊農業への利用を指すらしい。もしそうだとするなら、伝統都市の機能が明治中期までうまく作動していた訳であり、「伝統都市の解体」は云えないだろう。自家撞着に陥っている。

著作とチャドウィックの膨大な調査報告を見よ——曲がりなりにも救貧行政が実施されていたことで、1831年にも、1849-54年にもコレラ騒擾は発生しなかったと考えるべきではないか。著者の云うように、スラムの存在それ自体が、可視化されていようとなかろうと、伝統都市解体の指標ではあるまい。

再び成田氏の作品に戻ろう。氏の2番目の作品が、『「故郷」という物語—都市空間の歴史学—』（吉川弘文館、1998）である。²³⁾ 同書は彼の云う都市史の「第1期末期から第2期初期に至る期間」の、主に東京における「故郷」の物語である。どこの国の首都にも恐らくは妥当することだが、首都住民の大部分は地方からの移入民で構成され、絶えず更新される。上京者の数だけ故郷があり、故郷との繋がりがあり、また同郷者同士の都市における繋がりも形成される。故郷の思いは追憶・望郷から嫌悪・拒絶まで濃淡がある。著者はその時代の都市民の故郷との関係を、文学、歌謡曲などの大衆文化、啄木など文人の軌跡などのうちに探り、アイデンティティの危機などを描き出す。田舎から都会に出た農村青年は故郷の良さも悪さも意識するが、なかなか都会にも馴染めない。帰省するときには都会人を自覚し、田舎での生活に違和感を覚える。自分はいったい何者か、との思いは誰しも覚えるものであろう。これは我々が外国で一定期間生活すれば、自分が「エトランジェ」であることを嫌が応にも痛感させられるのと似ている。後段の外国人移民のアイデンティティ危機はまさしくこの延長にある。

都市空間のなかに移動の契機を取り込んだ「故郷」というコンセプトは面白いし、同郷会の活動もそれなりの位置を与えられるかもしれない。だが二、三の疑問もある。第一は時期設定に関わる。本書が扱う時代を「第1期の末期から第2期の初期」という実に中途半端な時期を対象とすることである。それが具体的には何年頃かは定かではないが、内容から推して1880年頃から1914年頃までと思われる。だが中途半端な時期設定についての説明も理由も見当たらない。云うまでもなく、歴史家にとって考察の時期措定は、考察そのものに関わる重要事である。中途半端な時期設定すること自体、氏が試みた前述の第1

23) 成田氏の近刊『近代都市空間の文化経験』（岩波書店、2003）は氏の3番目の著作だが、序論は前記の『都市と民衆』所収の論文であり、他の部分も1990年代前半までに公表された論文を一書に収めたものである。個々には興味あるものもあるが、本稿では取り上げない。

の作品の時期区分が適切ではなかった、ということにならないか。前記したように、氏が行った日本都市史の時期区分に何らの「指標」も提示されていないことに、そもそもの問題が潜むように思われる。

第二はそれと裏腹な関係にあるのだが、著者の時期設定と都市における「故郷の物語」とはどう切り結ぶのか、歴史的空間としての東京の時代性は、あまり明瞭ではない。また、氏がかねがね主張している国民国家の形成に絡め取られる日本の近代都市という視点も不明瞭に思える。

第三に、これは感想だが、現在「同郷会」は余り耳にしない。私の学生の頃は、東京や横浜にはそれぞれに「県人会」があって、地方出の「オノボリサン」に情報や住まいを提供していた。「同郷会」の今昔を通じて、上京者の故郷との繋がりや都会における結合の仕方などの変遷が判明するように思える。北島三郎「帰るか+」、井沢八郎「ああ上野駅」、細川たかし「望郷じょんがら」などの歌謡曲が人々に好まれるのは、現在も上京者に望郷の念が薄れた訳ではない証拠だろう。だが同郷会などが活動を低下したのは、何か重大な変化がそこに作用しているのではないか、この辺りへの言及も著者に望まれる。

Ⅳ 以上やや長めの準備作業を経て、本稿は中野隆生編の二作品のコメントに入る。中野氏は現在我が国のフランス近代都市史研究において、成田氏と並ぶ都市空間論を標榜する研究者である。ここでの二作品ともに、タイトルに「都市空間」が入っているのがその証拠である。

『都市空間の社会史 日本とフランス』（山川出版社、2004）には、序論のほか、Ⅰ都市の形成、Ⅱ都市民衆の世界、Ⅲ都市史研究の現在、の各項目に日仏各一本の論文が対比的に収められており、最後に文献案内が配置される。順次眺めてみよう。

中野隆生序論「近代都市史研究における日仏比較の可能性」では、日仏の都市史研究の変遷が述べられ、さらにその「眼差し」の違いが指摘される。日本では近代日本の形成に関心が集中したこと、都市空間の把握の仕方でも行政区画に限定されるくらいがあったこと、住民の表象として「都市的なもの」を捉える視点は弱いこと、対象としての民衆を捉える場合でも、下層社会に関心が集中したこと等が挙げられる。フランスの都市史研究では、我々がすでに見たように、地理学・社会学など隣接学問を援用した多角的な都市空間の考察がか

なりの蓄積を有すること、都市民衆全体に目配りがなされ、しかもその生活様様のみならず、心性にも関心が向けられていること、「都市的なもの」の拡がりを行政単位でみるのではなく、街区（カルティエ）から郊外まで広角的に眺めること等が特徴として指摘される。

「I 都市の形成」は、二論文から成る。先ずアラン・フォール「投機と社会—19世紀パリの大土木事業—」は、1853年から1869年まで実施された「パリ都市改造（オスマニザシオン）」を考察する。実は18世紀半ばに既にパリは改修の必要に迫られており、「撫でるような都市計画」が実施されていた。つまり、都市計画の手続き—1807年、33年、41年の土地収用法、これを補完する1850年「不衛生住宅の衛生化に関する法」、1853年の勅令—が制度化されていた。ナポレオン3世の指示と後援をうけて実際の大改造を行ったのはセーヌ県知事オスマンだが、それがこの時期になされたのは、1848年二月革命と六月暴動、49年のコレラ再流行などがきっかけであり、²⁴⁾ブルジョワジーなど富裕階層の「労働者のめったに入ってこない、似通った人だけと隣り合わせに住みたい」との願望を満たす、不動産資本の成熟があったからである。加えて、皇帝の信頼を盾に一切の譴責・罷免を受けつけない独裁的権力がこの大事業を可能にした。ブルジョワの快適空間はパリ西部に優先的に当てられ、民衆は初めのうちは都心の開発されない街区に居住したが、家賃高騰のため次第に東部・北部さらに郊外へと追いやられ、零細不動産会社などが造ったバラック小屋に居住することになる。

都市空間がこの事業でどう改造されてゆくのか、予備知識のない一般読者には、この小論文だけでは容易に理解できかねるが、それにしても暗渠下水道の整備は本論文でも言及さるべきであった。それは都市衛生化の切り札になるはずであり、ブルジョワの快適志向の象徴でもあるからである。²⁵⁾次に気にな

24) 前記川越論文との関わりでいうなら、パリの「伝統都市の解体」は既に18世紀後半に明確に認識され、1848—52年にピークに達した、と云える。前者は1783年の道路の幅と建物の高さとの比率に関する規定（いわゆる「建築線」というコンセプト）と道路測量図の作成である。伝統都市の解体のピークは、川越論文が云う1832年前後ではなく、1850年前後、すなわち49年コレラの再度の流行と50年不衛生住宅の衛生化法制定にある、と考えるのが妥当であろう。

25) もっとも下水本管への接続費用は所有者負担になるため、民衆がトイレ水洗化などその恩恵に浴するのはずっと後20世紀前半である、このためパリではその後も散発的にコレラが流行し、腸チフスは19世紀第2四半期以降、コンスタントに病死者を出している。松井道

ったことは、都市改造の財政的側面である。道路整備だけで 120～140 億フランもの支出があったというが、この費用をすべて借入に頼らざるを得ないのだが、その仕組みの説明が全くない。さらに支出ではその費用は推測するに土地収用の補償金にかなりの部分が使われたのではないかと、と思われるがフォーールの説明はない。パリ・コミューンで市庁舎が放火炎上したおり、資料も焼失したので仕方がないのだが…。²⁶⁾ 細部に互いに矛盾する叙述が散見されるが、²⁷⁾ フランス第二帝政期になされたパリ都市改造が、幾つかの好条件に恵まれて大掛かりで実行されたこと、都市空間の構成が単に平面的に変化しただけでなく、居住様式も階級により違いがあることなどが、明らかにされた。パリはこうして衛生機能の備わった近代都市になったが、その恩恵に浴するのはブルジョワジーなど富裕層に限られ、圧倒的多数を占める労働者・職人などは、依然として狭く不衛生な住宅に過密に起居せざるを得なかった。これが第三共和政の課題であることがよく分かる。

これに対応する日本側の論文が梅田定宏「首都東京の拡大—市街地・行政区画・都市域概念の変化—」である。これは江戸から東京と改名した首都の明治初期から昭和前期、東京都成立までの文字通り都市空間域の拡大を跡づける。それは p69 の図 1 に明瞭であるが、初期の市街地だけを「市域」と捉える思想から、緑地帯や衛星都市を含む多様な空間をも「市域」とする思想への転換がここに作用していたという。本論文では都市域の拡大が行政区域の拡大として

昭『フランス第二帝政下のパリ都市改造』（日本経済評論社、1997）は邦語では唯一の纏まった研究であるが、下水道整備によりコレラが鎮圧された旨のことを云うのは勇み足である。
26) 収用・家屋の取壊し、移転など著者の挙げる数字は、いずれも 1849-53 年の資料に基づいているが、それはオスマン事業の開始前の数字である

27) 例えば、改造事業の予算規模で、p48 では「1831 年にはわずか 2 億フランという少額の借入れ」とあるが、p52 では「(1851 年には) 昔からの原則に背いて 5,000 万フランという巨額の借入れ」とあり、p53 には「1853～70 年におけるパリの土木事業支出が道路整備だけで 120 億～140 億フランにのぼった」と記され、さらに p60 では「パリに投入された 14 億フラン」と述べられている。フランス人歴史家は一般に数字には無頓着だが、それにしてもこれらの数字の整合性をどう見るのか、気になる。もう一つは、ブルジョワの新しい生活様式と住まいの願望について、「台所、寝室、玄関といった機能がはっきりと分かれている」アハルトマンを見出ししていたという記述 (p44)、p49 の「新居を求めるブルジョワの熱い期待」と、「しかし裕福な階級が新しい住居を要望していたかどうかはそれほど明確ではない」という矛盾する記述が気に掛かる。全体の文脈から判断すると、この時代ブルジョワが広くて快適な住空間を求めて移動を開始したのは事実のようである。

捉えられている。隣接区域の人口が急増し市街化されると、そこを吸収合併するというパターンはどこでも同じだが、それは住民にどのような作用をもたらすのか、その点の言及も欲しい。これはたびたび登場する大阪についても同様なのだが、内務省、商工省、府または市の都市計画構想がそれぞれの思惑の違いから衝突することは分かるのだが、実際どの程度実現されたのか、どんな影響を与えたのかが不明である。そうした分析なしに、市区改正、都市計画、地方計画、国土計画、と云われてもそれは画餅に過ぎない。²⁸⁾

「Ⅱ都市民衆の世界」は、三論文から成る。アラン・フォール「民衆生活とカルティエーパリ、1860～1914年」は、民衆の居住空間カルティエはこれまでイメージされていたローカルで均質的な空間ではなく、外に向かって開かれた空間であることを鮮明に描き出した。労働者街区の粗末な集合住宅は狭く、衛生設備も不備であり、人々はプライバシーもなく無自覚に住んでいた、とされた。しかしそのような環境でも庶民は快適に住む知恵とルールをもっていたという。大人が互いの住宅に足を踏み入れることは減多になく、他所の子どもを叱っても体罰を加えることは厳禁であり、家庭内のいざこざに介入することは回避された。民衆世界では相互扶助は基本だが、一方的な扶助は嫌われた。民衆カルティエでは人々は愛着をもち定着すると考えられてきたが、実際は頻繁に移動を繰り返していた。家賃を払えずに引越す場合のほか、より快適な広い空間を求めて移動する場合も多かった。仕事が安定しない当時の雇用慣行の下では職住接近は大した問題ではなかったという。

本稿はこの時代のパリの民衆空間を陰影鮮やかに描いた好論文であり、先のパリ都市改造のそれよりも遙かに出来が良く、パリ民衆史の傑作の一つに入ると思う。

日本については二編の論文が掲載されている。原田敬一「都市下層と『貧民

28) これは本論文とは直接関わらないが、空間容量の点でも、法体系の点でも「支配的」だった江戸の武家地は、維新後の東京ではどのような変化を蒙ったか、市街地の育成とどう関わるのかという疑問を覚えた。また、やや細かいことだが、「東西に長い東京都」が1943年に誕生した経緯のなかで、分かりにくい叙述がある。多摩地区は都制編入を強く望んだこと、内務省が方針転換したのは多摩地区を東京府へ編入した際、地元の反対を押し切って移管を強行した経緯がある、と述べられている。(p97) これは東京都に編入される前、すでに多摩地区は東京府に編入されていたことを意味するが、では多摩地区はなぜに東京府には編入反対、東京都には編入賛成と態度を変えたのか、内務省には変化があったのかどうか、この辺りの丁寧な説明が望まれる。

窟』の形成－近代の京都・大阪・東京－」は、財産を持たず劣悪な居住環境に住む人々を「都市下層」と定義し、京都・大阪・東京におけるスラムの系譜を纏めたものである。江戸期の非人小屋や賤民村が近代にはいり木賃宿や長屋となった京都、「ぐれやど」からスラムに転化した大阪、裏長屋や木賃宿が立地するところがスラムと見なされる東京などと要約できるだろう。本稿の考察は副題とは異なり専ら江戸末期であり、近代の貧民窟ではない。ところで、貧民窟やそこに居住する都市下層をなぜ問題にするのか。彼らが日本都市史研究で云う「国民国家の形成」に何らかの障碍になったのか。もっと直截的に云うなら、その居住環境が伝染病の温床となり、「社会の脅威」となったから、公衆衛生上監視され排除されるのか。それとも変革の主体になり得るという視点か、その辺りの問題関心が示されたい。²⁹⁾

阿部安成「都市周縁に向う感知の力－20世紀初頭の横浜－」は、1913年の『横浜貿易新報』が連載したスラム探訪記事に基づいた論文である。本論も前者同様に都市下層を扱っており、「我々」の差別意識の淵源をたどることにあるようだ。つまり、新聞記者の貧民を見る眼に、憐憫、異様、貧民の自助努力や相互扶助に驚きの念を指摘し、貧民を「他者」とする「我々」があるのだという。だが、地方紙のある年の短期間の特集記事だけで、横浜市民の差別意識を云々できるのだろうか。確かに記者の差別的眼差しをそこに見ることは容易い。だが、それが直ちに民衆の輿論形成に与って力があつた、と断定するには途惑いを覚える。ここでも民衆は専ら受身の存在と見られている。寧ろ私には、著者が「感知の力」をもつジャーナリズムを肯定的に評価しているように受け取れる。それは新聞を「都市運営にかかわるエージェント」と表現するところにも看取されるが、如何か。³⁰⁾

29) 「おわりに」の箇所で幾分言及がある。「都市下層研究は戦後社会の起源を確かめ軌跡をたどることであると同時に、現代社会における差別形成史の意味をももつことを再確認したい」と。(p160) 確かに現在も続く被差別部落問題の起源を近世に求める意味は分からぬことはないが、それは都市史研究の大筋ではあるまい。しかも著者自身が、これら貧民窟住民は被差別部落のような身分的差別を受けなかった、と云う。(p160) 矛盾しているように見える。すると近代都市空間における都市下層を研究する意義はどこにあるのか、差別構造なのだろうか、著者の問題関心をききたい。

30) 「都市周縁に向う感知の力」とは文学的で魅力的なタイトルだが、都市周縁を地理的概念として使っているとすれば、違和感を覚える。1911年に市域拡大した横浜市は人口144万人、面積36平方キロの規模だったというのが、スラムのある浅間町は市の中心部だし、南太田や

都市民衆に関する三篇を眺めたが、日仏の落差に驚きを禁じえない。日本では民衆を都市下層民で代表させる傾向が強く、それは差別意識の歴史的淵源を探るという問題意識に基づいている。だが、原田氏自身がいみじくも云うように、都市下層が被差別部落のような身分的差別を受けなかったとするなら、研究の土台そのものが揺らぐのでないか。偏見に囚われた新聞・雑誌などジャーナリズム記事ではなく、普通の市民がスラムをどう見ていたのか、これが判明すれば貧民観は大きく変化するに違いない。問題意識においても国民国家へ統合されてゆく民衆という受身的な見方でよいのか、考えさせられる。

「Ⅲ都市史研究の現在」には日仏二編のサーヴェイが収まる。日本については、たびたび登場する成田龍一氏が、「日本近代史研究における閉塞・相克と新たな兆候」と題して、この30年の我が国における都市史研究を総括している。本稿で取り上げた著作を含めて研究史を見事に整理している。1990年代に入って日本の都市史研究が停滞・閉塞しているのは、領域としての都市史研究が先行し、方法としての都市史が行き詰まっているからだという。それは問題意識が稀薄になり、課題と方法が鈍磨したせいだという。これを打破する動きとして阿部安成氏の研究、小林丈弘編『都市下層の社会史』（解放出版社、2003）、前掲成田龍一『「故郷」という物語』、杉原達『越境する民』（新幹社、1998）、小田光雄『〈郊外〉の誕生と死』（青弓社、1997）などが出てくるといふ。門外漢の私も閉塞感は感じられるが、他方で氏の云う「方法としての都市史」は難解で分かりづらい。

アニー・フルコー「フランス20世紀都市史 その成果と課題」は、フランスの都市史研究の現状と課題を概観したもので、現在フランスの都市を取り巻く緊張した社会関係を踏まえて、実に多方面の課題が設定されており、率直に云って溜息が出るほどである。もはや都市を行政単位や居住空間だけで仕切ることすら意味をなさなくなつて、「都市的なもの」は全土に瀰漫しているという。それを著者は「領域」というタームで表現するが、例えば、住宅の性格でも建設主体による違い、扱う時期の長さによる「複数の時間の交差」、領域を構成する社会集団の実践、都市政策・住宅政策などにおける国家関与の程度、多様な社会住宅の建設とその真の目的、戸建てか集合住宅か、等が挙げられて

中村町は谷戸にはあるが、周縁ではあるまい。東京やパリを見てもスラムが都市周縁部だけでなく、都心部にあることは珍しいことではない。

いる。

本論を読むと、日本の都市史研究が比較的狭い問題意識に捕らわれていると感じざるを得ない。その一つの現れは外国移民の問題であろう。これは次の著作でも扱うことになるが、ヨーロッパ諸国は第二次大戦後多様な外国移民を受け容れてきたが、高度経済成長が一段落すると今や雇用機会が狭くなり、失業問題が生じた。それに連鎖して住宅危機、都市周縁部における治安悪化が浮上してきた。20世紀後半から21世紀の都市はこの外国移民とその末裔を構成員に含むことになり、緊張を孕む都市社会政策を迫られている。こうした現状認識を踏まえたうえでフランスの都市歴史研究は進めざるを得ない。

中野隆生氏が指揮した第2回日仏シンポジウムの成果が『都市空間と民衆 日本とフランス』（山川出版社、2006）である。本書は前作を受けて、20世紀の都市民衆が直面する変容と対応を日本とフランスの大都市について見る。序章に続く本論は、Ⅰ都市空間と民衆：日本、Ⅱ都市空間：フランス、Ⅲ都市と移入民、に分けられ、それぞれ二、三の論考から構成されている。順次眺めてみよう。

序章「空間への眼差しと都市の近現代」は中野隆生・成田龍一両氏の合作であり、中野氏が理論的な枠組みとフランスの研究状況について、成田氏が日本の研究動向を叙述している。都市空間を、物質的空間と観念的空間の総体とし、現実の都市的広がりを五つの局面で把握できるという。行政上の区画、高い人口密度と人口増加率、非農業者の高い比率、建築物の連続性、日常的移動の範囲がそれである。観念的空間とは、建築家や都市計画者の図面などに表象される空間や、民衆がイメージする空間などが重要だという。日本における都市史研究の蓄積と現状について、成田氏のサーヴェイは基本的には前作と変わりないが、私の印象では、都市空間における制度と出来事を接続させる方向に、都市空間論の停滞を打破する力を見出しているようだ。フランスにおける都市史研究の現状と課題については、前作でも見たが、本書のサーヴェイも基本線は同じであり、都市史研究の主力は、20世紀においては郊外の戸建て団地と社会住宅に、そこでの外国移民の存在をどう捉えるかにあることが縷々述べられる。

Ⅰ「都市空間と民衆 日本」には二編の論考がある。先ず大岡聡「東瀛の都

市空間と民衆生活－19世紀末～20世紀初頭の『町』住民組織－は、明治中期の四谷麴町12丁目と下谷区竹ヶ原、日本橋区久松町における町内会結成とその性格を比較考量している。麴町は江戸期に既に商業地として栄えた地区だが、1890年頃に独自に町制法をつくり、消防・防犯・祭礼・衛生などの活動をした。町内会を構成したのは表^{オモテダナ}店を営む地主と差配であり、裏^{ウラダナ}店住民は排除されていたという。旧武家地からさまざまな事情で町人地となった後者は「新開地」と呼称されるが、佐竹ヶ原でも久松町でも商人を核とする住民有志が消防・自警団を組織し町内運営を行っている。もう少し住民の社会的性格が分かると、自治組織としての町内会の性格も判然とするのだが、本論考は先に検討を割愛した小路田泰直氏の国家主導の自治組織編制を、実証的に批判する内容となっており興味深い。

高岡裕之「都市大阪の空間的拡大と都市計画－1920～40年代における大阪市の『郊外』問題－」は、戦間期の大大阪の形成を郊外の発達にみる。郊外化は北西部から北部・東部へと順次すすむが、それは大阪市に通勤する俸給生活者のベッドタウンとしての市街化である。これに対し工場労働者は職住接近を選択する傾向が強いという。こうした郊外化に行政はどのように対応したか。実はこの点は難解で本文を一読してもすっきりとは分からない。私が大阪の地理に不案内なこともあるが、国、大阪府、大阪市の三者の考えが錯綜しており、しかも時期により変化するという。当初大阪市は、都市計画事業の観点から「小区域」を想定し、府と国（内務省）の「大区域」構想と対立した。1924年「大大阪」は実はこの小区域に基づくという。1930年にはいると国・府ともに大区域構想を捨て、過大都市の抑制、衛星都市の構想へと変化する。ところが逆に大阪市は、1939年に従来立場を放棄し、大区域案を打ち出す。これは総力戦体制に対応したものだというのが、その根拠の一つに「大阪市を中心とする一大生活圏」があったという。

本論考は、前記芝原篤樹論文を引き継ぐ大阪をめぐる都市計画構想の変遷だが、公権力三者（国家、大阪府、大阪市）の思想と思惑が入り乱れ錯綜しているのを、歴史研究はまだ十分に整理しきれていない印象をうけた。例えば、関一市長の都市計画の考えすらも明瞭に確定できていない気がする。p72では、1920年代の大阪は「大都市主義」の背後に、「小さな都市計画区域の存在があった」とあり、p73では逆に、関一市長の目標が「大大阪」の建設であった、

と記述されている。さらに p85 では、実務を担当し後に大学教授となった中澤誠一郎の言を引いて、関一が田園都市論者、小都市主義者であり、そうした態度が大阪市の不自然なまでの小区域計画の一因だった、とある。この矛盾した記述を読者はどう理解すればよいのか。また、公権力三者が構想した都市計画事業の中身は何か、それはどの程度実現したのか、それにより市民生活はどのような変化を受けたのか、についても説明がほしい。

Ⅱ 都市空間と民衆：フランス、には 19 世紀と 20 世紀のバリの民衆空間にかんする二編の論考が収められている。

アラン・フォール「パリにおける産業雇用と労働者住居」は、副題に「距離の多元性、生活様式の多様性」とあるように、労働者の労働の場と生活の場、その間の移動を論じた興味ある論考である。これまでの定説では 19 世紀バリの労働者はカルティエを単位とする比較的狭い空間内で、労働し、仲間と語り、酒を飲み遊び、寝ていたとされる。だが氏の前作で眺めたように、実はカルティエは閉じた空間ではなく、外に向かって開かれていた。オスマンの都市改造以後その傾向は一段と明瞭になり、労働者は都心から次第にフォプール（周縁部）に、さらに郊外へと転居してゆく。だが雇用の場はそのまま都心に残ることも多く、従って労働者は時間をかけて通勤することになる。往復で 1 時間以上を要する郊外地帯からの通勤者が増えてくる。他方、建設労働者は辛い労働のせいか、できるだけ通勤距離と時間を短くするように、職住近接を選択する。また東北部などに立地した工場に仕事を見つけた労働者もまた、比較的近くに居住するという。他方家庭婦人は家事と仕事を両立させる必要から、フレキシブルな雇用機会を住まいの近所に見つける。労働と居住、それを繋ぐ移動手段は実に多様であり一概には云えない。と同時にそれは労働者の一つの選択可能性でもあるという。本論考は、我々がイメージする労働者の世界像を修正し豊かにしてくれる。著者が指摘するように、19 世紀のバリ労働者は頻繁に職場を変えるし、それに応じて住居も変える。勿論その範囲はある限られた空間ではあるのだが…。交通手段の発達と相関して、都心から遠い郊外へ居住空間が広がるのも戦間期の日本と同じである。この問題を扱うのがフルコーである。

アニー・フルコー「炸裂する都市空間の一世紀－バリ郊外、宅地分譲から団地へ－」は、パリジャンの直面した住宅問題を俯瞰する。バリは市壁により空間

的にも表象的にも、市内と郊外とに截然と区切られ、都市問題は市内にだけ存するものと見なされて、その解決の営みが20世紀前半まで続けられ、郊外は放置された。だがこの間パリ都市圏の人口は増え続けたから、しばしば住宅危機が現出した。庶民は空気のきれいな郊外に家を持つことを夢見ていた。これを叶えたのが民間の不動産業者で、パリから中間距離にある郊外に宅地を分譲したのだが、それは社会的インフラの未整備な更地だったので、購入者の不満は募りセンセーションを惹き起こした。折からのユニオン・ナショナル政権は、サロ法とルシュール法をもって事業費の半分を負担して住宅基盤の整備に努め、住民の持家願望の実現に寄与した。これは第三共和政の原則でもある「所有権への接近」を実現し、社会秩序の安定に資すると見なされたからである。戦間期は「郊外形成の黄金期」だったという。

第二次大戦後、事態は深刻になった。戦災による住宅破壊、復員兵、殺到する流入人口などで、パリ都市圏の居住環境は最悪になった。³¹⁾ これはもはや民間不動産資本で解決できる範囲を超えており、国家の積極的介入が不可避という思潮が生まれ、併せて居住権思想も叫ばれた。政策立案者は戦間期の戸建て分譲方式を忌避し、大規模住宅団地の建設に住宅危機の解決を託した。政府、自治体、社会住宅建設を担う非営利団体などが、比較的低コストの集合団地を建設し、庶民の当面の住宅危機に対処した。

本論考は、前半は「パリ民衆がどこにどのように住みたいか」という論点、後半は「パリ民衆を如何に住まわせるか」の論点に立脚して叙述されている。だが、住民が一貫して庭付き戸建てに住むことを望んでいたとすれば³²⁾、住宅問題は戦間期は「曲がりなりにも達成された」と云えるだろうし、戦後期の住民は「仕方なく郊外集合団地に住まわされた」と考えられる。さらに後述するように、そこに外国移民が大挙して入居してくると、19世紀の都市問題とは次元を異にする郊外問題が発生してくる。だが、本文を読む限り誠に不思議なことにこうした社会的緊張を孕む問題への言及はない。もう一つの疑問は、戦

31) パリの戦災を免れた住宅は老朽化が目立ち、フランス人が云う「快適」(アメニティ)を欠く住宅がかなりの割合に達していた。驚くことに、住戸内に上水道が引かれていず、トイレもない住宅が半分もあった。

32) 1947年の国立人口研究所の調査によれば、フランス国民の圧倒的多数は「庭付き戸建て住宅」を望んでいた。この点は、戦間期日本における民衆の「家」創出願望と一致する傾向であり、洋の東西を問わず庶民の戸建て志向は根強い。前記布川弘論文を参照せよ。

後の集合団地建設を牽引した政策立案者が、こぞって戦間期の戸建て分譲住宅を拒否したという記述が何度か繰り返されるが、その理由が納得的には語られない。それはイデオロギー上の反撥なのか。彼らが「止むを得ない選択」ではなく、巨大な板状・塔状集合住宅を造ったとすれば、民衆の願望を軽視したと見なされても仕方ない。しかもその住宅は決して住み心地が良いものではなかった。パリからかなり離れているという立地上の問題は問わないとしても、コストがそれまでの社会住宅の半分以下であり、住宅面積の基準も2室で34平米、3室で45平米と引下げられた。つまり「あばら家」からは脱出できたが、10年も経てばまたも「あばら家」になる住宅に転居したに過ぎないのではないか。これが政策立案者の戦間期の分譲戸建て方式への批判の結果なのか。それとも応急処置なのか。住宅の質についても言及が欲しかった。郊外問題の一因はこの辺りにも潜むと思われるからである。

「Ⅲ都市と移住民」はまさしくグローバリゼーション時代の都市が抱える問題である。まず外村大「戦間期日本の都市における日本人と朝鮮人—大阪市と東京市を事例に—」は、いわゆる在日朝鮮人と日本人との関係を複合的に見る。この時代朝鮮人の大きな流入が見られたのは、東京とくに大阪であるが、その属性は幾分違っていたという。東京には留学生の関係で比較的教育程度の高い朝鮮人が多く、しかも朝鮮各地からやってきて東京都区内に散在したが、大阪では全羅南道とくに済州島からの出身が多く、特定の地域に集住する傾向が見られたという。在日朝鮮人は差別的に処遇され、さらに関東大震災後には危険視されたが、日本人との日常的な関係も、東京では通婚や求職で日本人と交わる程度が高いのに対し、逆に人口の多い大阪ではそれらが低く、閉じた空間内で生活していたことが窺える。社会運動は1930年代に活発化したが、そこでも大阪は東京と違って民族色の強い独自の運動を展開したようである。朝鮮料理などエスニック・ビジネスも大阪・東京でそれなりに展開されたが、日本人に受容されるまでには至らなかった。エスニック文化活動は、東京でのプロレタリア文化活動との連繫をもちつつ演劇運動として展開した。さらに商業的興行も独自にあるいは朝鮮半島から芸人を呼び寄せてなされ、日本人のなかに朝鮮文化を意識させるレベルまで到達していたようであるが、帝国主義支配が強まる1930年代後半には、民族意識の覚醒を招くとして朝鮮語での上演を禁止され、窒息させられたという。在日朝鮮人への差別は我々の恥部であり、日

本人の歴史認識の空白でもある。我々自身がヒエラルキー的差別意識から解放されるためには、朝鮮人への蔑視と差別意識を直視せねばなるまい。

次の二つは同じ著者の類似のテーマなので一緒に扱いたい。すなわちマリ＝クロード・ブラン＝シャレール「パリ地方の外国人－その社会的位置と都市圏の拡大－」と同「パリの外国人空間、過去と現在－民衆の街区から多様なエスニシティの街区へ－」である。第三共和政期のパリの外国人が扱われる前者の論考によれば、彼らは大部分が個人の選択としてパリへ移住した。エリートや芸術家などもいたが主力は労働者であり、パリ東部・北部と近郊に叢生した工場や伝統的・家内の手工業に職を見つけた。またパリの「自由の都」という政治的神話は多数の亡命者をひきつけた。この時代のパリの外国人はフランスに隣接する諸国からの移住者が大半を占めたが、ドイツに敵対的な第三共和政はこれら外国人にも国民的アイデンティティを求め、同化政策が取られた。とはいえ、彼らはフランス人労働者よりももっと劣悪な労働・居住環境に生活せざるを得なかったが、彼らはパリ市内でも郊外でも同国人との絆を保ち、安心を確保しつつゆっくりとパリ社会に融合していった。戦間期は前述したようにパリに溢れた人々は郊外へ住居を移すが、外国人も例外ではなく、しかも、イタリア人やスペイン人などのように明瞭なコロニーを形成するものもあった。フランス社会への同化を嫌うジャーナリズム論調は排外主義を煽ったが、一般労働者は必ずしもその風潮に踊らされることはなかったようである。人民戦線や反ファシズムといった政治的事件が外国人同士、外国人とフランス人との距離を近づけたこともあった。外国人がパリに持ち込んだ文化もこの街の多様性に貢献した。これは戦後いっそう明瞭になる。

後者の論文「パリの外国人空間」は、先ず外国人移民が急増する第二次大戦後の新たな傾向を三つ取り上げる。それは、パリ地方の外国人は絶対的にも相対的にも戦間期よりかなりの程度増加していること、非ヨーロッパ人の比重が大きいこと、パリ市内の外国人の人口密度が郊外よりも高いことである。さらにその内実は決して一様ではなく、さまざまな社会身分の混合体であるという。こういう訳で、著者はパリ市内の二つの街区ベルヴィルとサン＝タントワースを取り上げる。サン＝タントワース街区は高級家具職の街であり、ギルド制が解体した19世紀初めから外国人職人も参入していたが、19世紀末になるとロシア系ユダヤ人とイタリア人が優勢になる。アトリエといってもそれは住居兼

用であり、外国人職人はフランス人と顔をつき合わせて仕事をした。そのため争いも生まれたが、ある種の連帯感情も生じた。³³⁾ この街区にはまた独立した外国人の経営する商店や娯楽施設が数多く誕生し、著者の云う「パリの坩堝作用」は1950年代まで続いた。

パリ・コミューンの中心的街区だったベルヴィルは、1960年以後その相貌を激変しつつある。先ずマグレブ人が、ついで中国人を筆頭とするアジア人がこの街区に根を下ろした。この結果フランス人の比率は低下したが、老朽化した住宅の跡地にできた高級住宅には、労働者に代わって管理職や自由業の人々が住むようになった。多様な人種の住む街区は、かつてのような「坩堝作用」を喪失した観があり、街区よりもっと小さな単位ごとに「社会空間が分有され」始めているという。「多文化共存」がここに出現したが、面白いことに民族間の緊張は他のどの都市よりも小さい。著者はこの点に坩堝作用のなごりを認め、さらにこの街区の多様性がパリにはプラスをもたらすと楽観的である。³⁴⁾

古き良きパリを懐かしむ世代と違って、若き著者はパリの変化にも柔軟でその未来にも楽観的である。だが、私には前述したように外国人移民の子弟たちの不安と不満は大きく、治安問題、郊外問題の根はここにあるように思える。十分な教育を受けられず、何の技能も身につけられず、フランス社会に居場所を見出しがたい移民の末裔、これこそ成田氏が『「故郷」という物語』で問題にしたアイデンティティの危機であろう。21世紀のフランス（あるいはEU）は彼らをどう処遇するのか。これは19世紀の社会的貧困と結びついた都市問題と同じくらい重大な課題となるだろう。コストはかかっても緩やかな同化政策を維持しないと、この異物はやがて癌と化し、テロリズムとして発現するようになる。学問的に云えば、外国移民とその末裔の側に立った社会学的調査と研究が望まれる。

33) キャフェやダンスホールでのオヘルニュ人とイタリア人の楽団は、騒ぎ争いもあったが、あるとき和解が生まれ、ここに両者のメロディを取り込んだ「ミューゼット・ワルツ」が誕生した。

34) 高級住宅に住む比較的裕福なフランス人は、閉鎖的になり、壓倒的な外国人の存在に不安を覚えている。国民戦線への投票はそれを示唆している。他方、知的階層のなかには、これら多様な外国人との共存を図りつつ、かつてのベルヴィルの神話を受継ぎ、「抑圧され戦う貧しき民衆の交差点」としてのベルヴィルを、構築しようとする人々がいるという。

V 都市空間に着目しつつ、30数編の予備的作業を経て、中野隆生編の二冊の著作を論評してきた。タイトルは幾分変わったが、内容的にはどちらも都市社会史の領域を扱い、都市域の拡大、都市計画、都市民衆の生活、貧民窟の状態、郊外と外国人移民などの力作が並んだ。だが、「都市空間」を方法的枠組みとして意識的に用いた論考はあまりなく、それをいわば自明のこととして考察している。さらに云えば、成田氏の云う「方法としての都市史」はあまり深化されず、領域・対象としての都市史が目立つ。

その上で若干の総括的論評をしてみよう。第一は、日仏の研究者の問題意識に落差があることだ。とくに都市民衆への眼差しにそれが感じられる。日本では下層貧民や貧民窟などに関心が寄せられる傾向が強いが、A. フォール論文に代表されるように—あるいは前記『アナール』学派の論考でも—フランスではもう少し広く、民衆諸階層として捉える姿勢が認められる。さらに日本では、統治され組織される民衆、といった受動的な民衆像が濃厚だが、フランスでは自律的かつ反抗的な民衆像が描出される。国民国家形成の時期のズレが作用しているのかもしれないが、日本では国家権力が市民生活の上に直に作用しており、研究者もそれを強く意識している。だが大岡論文にあるように、自主的・自律的な市民組織の存在や運動がなかったとも思われぬ。この辺りにも眼を配る必要があるのではないか。

第二はそれとも関連するが、日本の都市史研究では、近代都市の均一性を強調するが、フランスの研究では多様性を強調している。この対比は当を得ているか。本文でも述べたが、日本では規制・均一性・統制を云い過ぎないか。戦時は例外だが、平時でも公権力の市民生活へのコントロールが大きかったのだろうか。それはパリの「坩堝作用」と同類の、東京における都市生活の「共生のルール」とは見られないのか。

第三は、都市域の拡大・都市計画についてだが、本書を見る限り日本の研究では行政区域の範囲拡大に終始している、と云ったら云い過ぎだろうか。人口増加を後追的に市域拡大している自治体と、それに拘る研究者といった印象が強い。事業計画も、本文で述べたように国・府・都・市のレベルで異なる場合が多く、錯綜しているので分かりづらい。何が実現し、何が実現しなかったのか不明である。近代都市では公的空間は欠かせない。この観点からも都市当局は都市改造を必要とするが、それには多くの障害が伴う。だから私的空間

に優越する公益性の論理が必要となる。実際の事業遂行では、資金調達、土地・建物の収用、住民の立退き、代替地の手当て等々の問題に逢着する。日本の都市計画がうまく運ばなかったとすれば、そのいずれの要因に関わるのだろうか。土地と建物の収用についてだけ見ても、法律ができれば「事足れり」という訳にはゆかない。³⁵⁾

本書二冊は、中野隆生氏が企画運営した日仏シンポジウムの報告をもとに編んだものだが、上記のような対比的な問題を浮上させただけでも稔り多い企画であったと評価できる。本稿がこだわった「都市空間」論は、歴史学研究では必ずしも全幅の有効性が認められたわけではないが…。

(おおもり・ひろよし 成城大学経済学部教授)

§ 本稿執筆に利用した文献（引用順）

- [1] W.A. ロブソン編『世界の大都市』東京市政調査会 1958
- [2] 藤田弘夫『都市と権力』創文社 1991
- [3] 都市史研究会編『年報都市史研究』全11巻 山川出版社
- [4] 増谷英樹「大都市ウィーンの成立」歴史学研究会編『講座世界史4 資本主義は人をどう変えてきたか』東京大学出版会 1995
- [5] 玉井哲雄「都市史における都市空間研究」高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門』I 空間 東京大学出版会 1989
- [6] 高橋康夫「中世都市空間の様相と特質」高橋・吉田編『日本都市史入門』I 空間 東京大学出版会 1989
- [7] 伊藤毅「中世都市と寺院」高橋・吉田編『日本都市史入門』東京大学出版会 I 空間 1989
- [8] 伊藤毅『都市の空間史』吉川弘文館 2003
- [9] 宮本雅明「空間志向の都市史」高橋・吉田編『日本都市史入門』I 空間 東京大学出版会 1989

35) A. フォール氏は1841年土地収用法、1850年不衛生住宅の衛生化法、1852年の勅令をもって、「伝統的で確固たる不動産所有」という障害が取り除かれたとか、「土地収用とは要するに公的権威による土地の流動化のことである」とか云うが、事はフランスでもそれほど簡単ではない。所有者と借地・借家人に事業の公益性を説得し、それなりの金銭補償をせねばならないのであり、これには途方もない時間と金と労力が要るのである。ナポレオン3世の独裁的権限が否定された第三共和政において、パリ結核感染地区の収用と再開発がセーヌ県議会で幾度となく論議され計画されたのだが、戦間期には部分的にしか実現しなかったのも、このことを示唆している。これに関連して、日本における旧武家地の所有が明治にどう変わり、東京の都市計画ではどのように処理されたのかも説明されたい。旧武家地が明治期には「転用」されたという議論があるが、公的空間の確保という観点からきちんと説明する必要があるのではないか。

- [10] 宮崎勝美「江戸の武家屋敷地」高橋・吉田編『日本都市史入門』Ⅰ空間 東京大学出版会 1989
- [11] 久留島浩「祭祀の空間構造」高橋・吉田編『日本都市史入門』Ⅰ空間 東京大学出版会 1989
- [12] 矢守一彦『「ニュルンベルク年代記」と都市景観図』中村賢二郎編『都市の社会史』ミネルヴァ書房 1983
- [13] 長谷川孝治「中世イギリスのニュータウン」中村編『都市の社会史』ミネルヴァ書房 1983
- [14] 川北稔「イギリス近世都市の成立と崩壊」中村編『都市の社会史』ミネルヴァ書房 1983
- [15] 福井憲彦「近代生成史から都市空間の解剖へ」二宮宏之・樺山紘一・福井憲彦責任編集『アナル論文選4 都市空間の解剖』新評論 1985
- [16] フランソワーズ・ショエ「都市を見る眼」二宮宏之ほか編『都市空間の解剖』新評論 1985
- [17] ジャン・クロード・ペロー「18世紀における社会関係と都市」二宮宏之ほか編『都市空間の解剖』新評論 1985
- [18] アルレット・ファルジュ&アンドレ・ジスベール「18世紀パリにおける暴力」二宮宏之ほか編『都市空間の解剖』新評論 1985
- [19] 小木新造「18世紀 江戸の都市空間」二宮宏之ほか編『都市空間の解剖』新評論 1985
- [20] 田中峰雄「中世後期のパリ左岸地区」中村賢二郎編『歴史のなかの都市』ミネルヴァ書房 1986
- [21] 川北稔「ファッションとスラム」中村編『歴史のなかの都市』ミネルヴァ書房 1986
- [22] 白幡洋三郎「花見と江戸」中村編『歴史のなかの都市』ミネルヴァ書房 1986
- [23] J.L. マックレイ「江戸橋」鶴川馨他編『江戸とパリ』岩田書院 1995
- [24] ロジェ・シャルチュエ「権力と空間、パリにおける投資」鶴川馨他編『江戸とパリ』岩田書院 1995
- [25] R. H. Guérand, *Les Lieux*. R.H. ゲラン
- [26] 石塚裕論『日本近代都市論－東京：1868-1923－』東京大学出版会 1991
- [27] 成田龍一「近代都市と民衆」《近代日本の軌跡》9 成田龍一編『都市と民衆』吉川弘文館 1993
- [28] 成田龍一「身体と公衆衛生－日本の文明化と国民化－」歴史学研究会編『講座世界史4 資本主義は人をどう変えてきたのか』東京大学出版会 1995
- [29] 北原糸子「江戸から東京へー都市問題の系譜ー」成田編『都市と民衆』吉川弘文館 1993
- [30] 布川弘「都市民衆の階層と民衆運動」成田編『都市と民衆』吉川弘文館 1993
- [31] 芝原篤樹『巨大都市の形成－市区改正から都市計画へー』成田編『都市と民衆』吉川弘文館 1993
- [32] 岡田知弘『重化学工業化と都市の膨張』成田編『都市と民衆』吉川弘文館 1993
- [33] 雨宮昭「戦争と都市－強制的画一化と都市形成－」成田編『都市と民衆』吉川弘文館 1993
- [34] 川越修「ヨーロッパの都市／日本の都市」成田編『都市と民衆』吉川弘文館 1993
- [35] 大森弘喜「1832年パリ・コレラと『不衛生住宅』－19世紀パリの公衆衛生－」成城大学『経済研究』164号
- [36] F. Haas & S. S. Haas, The origins of *mycobacterium tuberculosis* and the notion of its

- contagiousness, W. Rom & S. Garay, *Tuberculosis*, Little, Brown and Company, New York, London, 1995
- [37] 成田龍一『「故郷」という物語－都市空間の歴史学－』吉川弘文館 1998
- [38] 中野隆生「近代都市史研究における日仏比較の可能性」中野隆生編『都市空間の社会史 日本とフランス』山川出版社 2004
- [39] アラン・フォール「投機と社会－19世紀バリの大土木事業－」中野編『都市空間の社会史 日本とフランス』山川出版社 2004
- [40] 梅田定宏「首都東京の拡大－市街地・行政区画・都市域概念の変化－」中野編『都市空間の社会史 日本とフランス』山川出版社 2004
- [41] アラン・フォール「民衆生活とカルティエーハリ, 1860～1914年」中野編『都市空間の社会史 日本とフランス』山川出版社 2004
- [42] 原田敬一「都市下層と『貧民窟』の形成－近代の京都・大阪・東京－」中野編『都市空間の社会史 日本とフランス』山川出版社 2004
- [43] 阿部安成「都市周縁に向う感知の力－20世紀初頭の横浜－」中野編『都市空間の社会史 日本とフランス』山川出版社 2004
- [44] 成田龍一「日本近代史研究における閉塞・相克と新たな兆候」中野編『都市空間の社会史 日本とフランス』山川出版社 2004
- [45] アニー・フルコー「フランス20世紀都市史－その成果と課題－」中野編『都市空間の社会史 日本とフランス』山川出版社 2004
- [46] 中野隆生・成田龍一「空間への眼差しと都市の近現代」中野隆生編『都市空間と民衆 日本とフランス』山川出版社 2006
- [47] 大岡聡「東京の都市空間と民衆生活－19世紀末～20世紀初頭の『町』住民組織－」中野編『都市空間と民衆 日本とフランス』山川出版社 2006
- [48] 高岡裕之「都市大阪の空間的拡大と都市計画－1920～40年代における大阪の『郊外』問題－」中野編『都市空間と民衆 日本とフランス』山川出版社 2006
- [49] アラン・フォール「バリにおける産業雇用と労働者住居－距離の多元性, 生活様式の多様性」中野編『都市空間と民衆 日本とフランス』山川出版社 2006
- [50] アニー・フルコー「炸裂する都市空間の1世紀－バリ郊外, 宅地分譲から団地へ－」中野編『都市空間と民衆 日本とフランス』山川出版社 2006
- [51] マリ＝クロード・ブラン＝シャレアル「バリ地方の外国人－その社会的位置と都市圏の拡大－」中野編『都市空間と民衆 日本とフランス』山川出版社 2006
- [52] マリ＝クロード・ブラン＝シャレアル「バリの外国人空間, 過去と現在－民衆の街区から多様なエスニシティの街区へ－」中野編『都市空間と民衆 日本とフランス』山川出版社 2006

